

Title	増淵龍夫著 中国古代の社会と国家：秦漢帝国成立過程の社会史的研究
Sub Title	
Author	平野, 絢子
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.5 (1960. 5) ,p.494(78)-
JaLC DOI	10.14991/001.19600501-0078
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600501-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

増淵龍夫著

『中国古代の社会と国家』

—秦漢帝国成立過程の社会史的研究—

一九二〇年代末以来中国革命の当面する中国社会の歴史的性格の規定をめぐって、アジア的生産様式を東洋社会独自の社会構成によるとする見解と、それを奴隸制・封建制という継起的社会発展の普遍的な発展段階に関連づけて解釈しようとする見解とが対立したことは周知の如くである。マジアル→ウイットフォードの系譜において発展した「東洋的社会の理論」、大規模な治水灌漑工事を国家が必要とする自然的、地理的条件が「西洋的」封建制の階級秩序形成を排除してアジア的デイスボティズムを維持し、その体制を变革する力は体制内部からは生れてこない、という考え方に對して、社会発展の方法的規準によりながら「実証研究の面に深い開拓の筆を打ちこみ、そこから方法自体への検討の道を開く」にはきびしい研鑽の道程が必要で

あった。

本書は秦漢時代を基本的には奴隸制と規定し、劉邦集團の分析を媒介として形成過程にある漢の国家権力の中核構造との同質性において漢代家族をとらえようとした西嶋定生氏のとをうけて、先秦時代の氏族制的邑共同体の分解によって放出されてくる個々の家々や個人を再び結びつける新しい人的結合關係、そこに形成されてくる新しい社会秩序を、同じくその共同体の崩壊過程から生れてくる新しい国家権力、専制主義的な秦漢帝国の形成の具体的過程とそのもとにおける社会秩序の固有な構造を「統一の視野のもとに」明らかにしようとするきわめて意欲的な力作である。その底には、「所謂名田所有者や劉邦を中心として集る集團の組織分子を家内奴隸制という普遍的概念で一義的に規定しようとする方法的規準」への疑問もある。

その内容は、序論、中国古代社会史研究の問題状況。第一篇は戦国秦漢社会の構造とその性格で先秦時代の氏族制的秩序の崩壊過程から生ずる新しい人的結合の習俗關係にもとづいて形成される社会秩序の特異な構造を豪族を中心に分分析し、その心情的な人的結合が支配關係を如何に内面からささえ強化したか

七八 (四九四)

を、法的規範との関連からみる。第二篇官僚制の成立とその社会的性格では今みた民間秩序と並列して形成される中央集権的官僚制を同質一体として、専制君主制の政治秩序として考察し、以上を背景として第三篇古代専制主義の成立とその経済的基礎で専制君主権力の基礎を考究し、その固有な性格・民田所有者に對する支配強化を必要とした・を郡県制成立過程の動態的分析のなから析出ししようとするものである。(弘文堂・A5・四五四頁・一二〇〇円)

—平野絢子—

安永武巳著

『消費経済学、日本の消費構造と需要予測』

戦後日本経済は回復過程から新しい成長過程へとすばらしい発展を示した。この間我々の消費生活も著しい改善を見せ、新製品も続々と登場している。経済の消費面は我々の日常生活に最も近いため、だれでも一応の事は知っており、エンゲル係数等の名称も親しみ

ぶかいものがある。しかし一歩進んで戦後の消費回復過程はどのような道をたどったか、消費水準はどのように測定されるべきか、経済成長、景気変動と消費の關係、消費の輸入依存度、消費函数、需要予測の測定と必要となつてこよう。本書はこれらの問題に答えるため執筆され、第一部で国民生活の姿を、第二部で国民経済と国民生活の関連を、第三部として需要予測の理論と実際という表題の下に以上の理論と実際が展開される。安永氏の立場は序文でも示されているが、各種の展開と予測の後に、最終の章、将来の国民生活の構図の中で、「以上により七・二%というような経済成長を実現するためのカギは、貯蓄よりもむしろ消費の育成にあるといえる。かくて消費はもはやそれが三次部門の享樂的消費であつたとしても、それが正常な余暇 Leisure の消化であり、人を墮落の淵に陥れるものでないかぎり経済の発展のためにはむしろ必要であり、その意味で従来罪惡視された『消費』はもはや美德と化し、反対に刻苦勉勵、勤儉貯蓄を至上とする尊徳精神は、すでに過去の経済モラルに属し、そうし

た考え方はいまや経済を阻害する危険な思想となりつつあるといえよう。同様に三次部門は価値を生まないというマルクス流の考え方もこのような経済のもとではもはや妥当しないといふことができよう。」と明瞭にせめられている。更に五年後には都市のエンゲル係数は五ポイント低下し、内地米は増えるが、外米はへり、畜産品や新鮮な食料は増加し、耐久消費財、合成繊維もふえるが、最も大きな変化はサービス業の革命的変容であり、娯樂の増加も単なる量の増加ではなく、質的にも変化し、古人が「之を樂しむ」という所にも達しようという。これに對して、いわゆる貯蓄・資本蓄積論者からあまりに樂觀的であるとの批判もであろうが、消費の鬼安永氏の情熱と日本経済のはかりしれない成長への期待が感ぜられるのである。(至誠堂・A5・四一七頁・五〇〇円)

—佐藤 保—

『社会経済史大系』

「いまや新しい世界思潮を反映して、わが

歴史学界においても、従来のヨーロッパ中心史観の克服が叫ばれ、世界史の見直しが要請されている。しかし、焦燥にはしらず、独善におちいらずにこの大きな課題にたち向うためには一方において歴史研究に従事するものの絶対な協力体制をうちたてる必要があると同時に、他方において、まずなによりも、十八、九世紀以来の社会科学の基礎的諸概念を生み出した、ユニークな歴史的個体たる西ヨーロッパの社会経済の発展を、もう一度新しい視角から、最近の斯学の研究水準に照らして、意欲的・実証的に検討することが必要である。」

以上を引用した発刊の辞にあるような世界的観点で全十巻にわたり刊行されつつあるのが本講座である。現在までに刊行されたのは中世前期、中世後期、近世前期Ⅰ、近世前期Ⅱの四冊である。この他古典古代、近世後期Ⅰ、近世後期Ⅱ、現代、社会経済史家評伝、日本における社会経済史学の発展といった各巻が予定されている。新しい世界史の観点がこの書物の中でどのように具体的実証の労作を通じ貫かれ、書き表わされるかについては講座全体を読んだ上でなくては結論的につことはできない。しかし現在まで出た巻につ